

## ヘルマン・ヘッセと政治

### 根本道也

詩人ヘッセの名前は「ペーター・カーメンツィント」（「郷愁」）や「青春は美し」などの美しい青春の書と結びついて、とにかく抒情的詩人の姿をのみ思い浮かべがちである。だから、「ヘルマン・ヘッセ」という人名と「政治」という言葉を結びつけたこの表題は、いささか奇異の感を与えるかも知れない。しかし、もとより奇を衒つてのみの付題ではない。というのも、1877年に南独に生れた彼が青春の教養時代を送つたのは、精神の頽廢が叫ばれた世紀末のヨーロッパであり、更に今世紀に入つて、二度の大戦を軸に激動した世界の真唯中に生き抜いたのだから、彼の人生を歴史の中のそれとして顧るならば、おのずから冒頭の如き表題も考えられよう。

さて、彼の政治観の根幹をなすものは、現代に対する時代批判或は文明批判である。従つて私たちはまず、現代に対する彼の診断にしばらく耳を傾けることにしよう。この意図に誂え向きの文献といえは、それは、ヘッセが、いまだヒットラーの横暴続く1943年にスイスで出版し、彼の最後の大作となつた≫*Das Glasperlenspiel* ≪（日本訳名は「ガラス玉演戯」或は「硝子玉遊戯」）の序文に描かれているフェュトン時代<sup>1)</sup>の素描である。

彼の描くフェュトン時代とは、25世紀の未来点から見た20世紀の現代（正確には20世紀前半）を指すのであつて、その描写は現代の政治及び文明への批判に終始している。つまり、そのフェュトン時代なる呼名が象徴的に示しているように、ヘッセは私たちの時代を、新聞の文芸娯楽欄が風靡して真の教養が失われている時代と観ているのである。序文に描かれたフェュトン時代とは大略次のようなものである。

精神が墮落していたと云われるフェュトン時代も決して精神に乏しかつた訳ではないが、精神に対処する法を知らなかつたようである。というよりむしろ、

生活と国家の運営の中で精神に相応しい地位と機能をあてがうことを知らなかつたようである。それでこの時代に精神は品位を落し、買収され易くなり、自己を放棄するに到つた。新聞の文芸娯楽欄が教養を求める読者の主要な栄養をなしていた。それはまだしも、詩人と呼ばれる人、或は大学教授と呼ばれる人までも、そういう仕事にかり出されていたことは注目し得る。そういう文章で人気のある内容は、有名な男女の生活にちなむ逸話や彼らの文通などであつた。そういった漫談の題を読んで訝しく思うのは、そんなものを毎日の読み物としてむさぼり読んだ人がいたという事情よりも、むしろ名声も地位も立派な素養のある著者が、無価値な興味本位のものの巨大な消費に「奉仕」する一役をかつたという事実である。奉仕するという表現はいかにもよくその特徴を表わしているのであるが、その表現はまた、機械に対する人間の当時の関係もあらわしている。子供じみた迷の遊び（クロスワード・パズル）をし、教養に資する論文を読んでいたそれらの人々は、決して無邪気な子供でも、遊惰な人種でもなかつた。むしろ彼らは、政治的、経済的、道徳的動乱と動揺のただ中に怯て躡り、身の毛のよだつような戦争と内乱を幾度も経てきたのであつた。彼らのささやかな教養の遊戯は、単に楽しい無意味な子供じみたことではなく、目を閉じ、解き難い問題や不安な没落の予感を避けて、できるだけ無邪気な幻想の世界に逃れようとする深い要求に即応していたのである。彼らは、根気よく自動車の操縦や、難しいカルタ遊びを習い、夢みながらクロスワード・パズルを解くことに没頭した。それというのも、教会からはもはや慰められず、精神からは助言を受けず、死や不安や苦痛や飢餓に対しては、ほとんど無防備だつたからである。あれほど多くの論文を読み、講演を聞きながら、恐怖に対し自己を強化し、死に対する心中の不安を征服するためには、時間と骨折を惜んだ。彼らは痙攣しながら生を送り、明日というものを信じなかつた。そして教養がかつて持つていた概念を失つていたにも拘らず、その時代の市民たちは教養の概念にまだ大いに執着していたので、彼らに対し、専門家や精神的切り取り強盗の輩によつて理解し難い程多量の講演が行われた。そういう講演では聴衆は終始全く受動的であつた。詩人に関する講演も聞いたが、その作品を一度だつて読んだこともなければ、読む気もなかつた。その上、幻燈器械で肖像を映

してもらった。こうして新聞のフェュトンと全く同様に意味を失つたばらばらな教養価値や知識の断片の大洪水の中をもがいた。

以上は「ガラス玉演戯」の序文の梗概である。ヘッセのこのような現代文明批判、即ち現代文化は不自然な歪められたものであるという観方は、当作品の出現を待つまでもなく、既に彼の初期の諸作品に熱烈に吐露されており、以後の作品を貫く縦糸の一つとなつている。因みに、ヘッセの出世作「ペーター・カーメンツイント」(1904)の一節を見てみよう。青年ペーターは南の国イタリアへ旅し、ウムブリアの美しい春の野を遡る。そこで彼の心に生命の泉が滾々と湧くのであつた。「ウムブリアで私は聖フランシス、即ち『神の楽人』の跡を慕い探ねた。フロレンスでは私は15世紀の生活を絶えず頭に想い描いて楽しんだ。故郷にいた頃、既に私は私たちの今日の生活様式に対して辛辣な諷刺を書いたものだつた。だがフロレンスで初めて私は現代文化の薄つぺらなみずぼらしい滑稽さを感じた。……この土地でなら私は人々ともつきあつてゆける。ここでなら私は絶えず生活の素直さを愉しむことができる。しかもその自然さの上には、古典の文化と歴史の伝統が高貴に優雅に横たわつているのだ。」<sup>2)</sup> 顧るにヘッセの教養時代は世紀の変わり目頃即ちニーチェの言葉が予言者のそれのように迎えられ、物質文明の進歩横行に対する反動が様々な形で現われた頃である。歪められた教養から解放されて、純粋な自然と自己本来の面目に帰ることを目指すルソーやペスタロッチもニーチェや聖フランシス等と共に、青年詩人ヘッセの感受力豊かな心を振憾したのであろう。中でもニーチェは、ヘッセに数々の類似性が内在していた為にか、しばしばヘッセの精神の中に熱狂的な生命の擁護者として甦り来り、問題を展開し且つ解決する力の一部となつた。次はそのニーチェの言葉である。「見よ、これら無用なる人間共を、彼らは常に病んでいる。彼らは胆汁を吐瀉し、それを新聞と称す。彼らは互いに啖いあつて、しかも消化することができない。

見よ、これら無用なる人間共を、彼らは富を追求し、その為を増々貧に墮する。彼らは権力を欲し、まず権力の鉄挺なる多額の金銭を欲する。この無力なる者共が、<sup>3)</sup>かくして青年期に培われた時代批判の眼は次第に成熟して、作品「ガラス玉演戯」のフェュトン時代の素描へと発展した。そのフェュトン時

代とは、同作品の「回章」なる章であらためて説明されたところによると、次のような相貌も呈していたようだ。

フェュトン時代は、精神が衰退し、最大の規模で政治的権力闘争が行われていたので、「戦争」の世紀とも呼ばれた。到る処で戦闘、殺人、破壊が行われたが、更に悪いことには、双方とも、悪魔に対して神の為に戦うのだ、という信念を持っていた。このような暴力時代の圧迫には精神の代表者も大抵は耐え得なかつた。或者は屈服して、才能や知識や方法を権力者に役立てた。たとえば、一大学教授は「2の2倍が何であるかを決定するのは、大学の教師ではなくて、将軍である」と云つた。権力者や標語に奉仕したものは、なるほど職とパンを得、そういう奉仕を拒んだものは、餓えなければならなかつた。研究ばかりでなく、学校経営も、権力の目的や戦争の目的に役立たない限り、急速に衰えた。とりわけ世界史は、そのつど支配的になつた国民によつてひたすら自己本位にされ、極度に単純化され、作りなおされた。そして遂には学校の中まで歴史哲学と雑文文化が支配したのであつた。

要するに、ヘッセがフェュトン時代の描写により、私たちの時代とその文化の特徴として指摘していることは、生活の荒涼たる機械化、道德の深い低落、国民の信仰喪失、芸術の不純さ、等である。

「ガラス玉演戯」が出版された翌年（1944年）には遂に第二次大戦も祖国の敗戦をもつて終つた。敵側にあつて常にヘッセを励ましつつも、終戦を待たずに死んだ平和主義者ロマン・ロランに、ヘッセは評論集「戦争と平和」(Krieg und Frieden, 1946)を捧げた。それは第一次大戦以来の評論を編んだものであるが、後にそれに加えられた「感謝の言葉と道義的観察」(Danksagung und moralisierende Betrachtung, 1946年ゲーテ賞受賞の際の謝辞)では、既に指摘した現代の諸々の誤謬の原因を、次のように診断する。「人類が今日のような状態に墮しめられているのは、二つの精神病即ち科学の技術という誇大妄想と、国家主義という誇大妄想の故だ、というのが私の意見なのです。この二つが今日の世界の相貌を形造り、自意識をつくり出しています。これらが私たちに二つの世界大戦を、その凡ゆる帰結と共に招来したのであり、その狂暴な嵐が吹き終るまでには、尚様々のこれに類似した結果を惹き起すだろうと

思います。』<sup>4)</sup> 時代の精神病に対する詩人の診断も二つの大戦を経た後では、このように二つの焦点に絞られたようである。また同じ箇所で、勿論ゲーテに値するなどと云うのではないが、科学の技術と国家主義という二つの誇大妄想に時代が病んでいるという自分の診断にゲーテも半ば賛成してくれるだろう、といささか自負した後、次のようにその節を結んでいる、「この二つの世界的病患に対する抵抗こそ、今日のこの地上の最も重大な課題であり、精神の正当な権利であります。大流の中の小さな一つの小波である私の生涯もまたこの抵抗に捧げられました。」<sup>5)</sup>

戦時中も相変らず政治的権力に与みすることなく、祖国を離れてスイスのモンタニョーラに（1919年以來）住んでいた為に、ヒットラーの虐政と戦争の恐怖を共に苦しまなかつた等と、彼に色んな非難が浴びせられた。勿論、羨望や誤解による非難であろう。1946年に書いた「ドイツへの手紙」(Ein Brief nach Deutschland)によると、楽園といわれるあのスイスでさえ、戦時中は毎日のように、あの鳶色の制服を着た悪魔の親切な隣人ごかしな訪問に悩まされ続けたということである。このような直接、間接の圧迫にも拘らず、詩人をして「この二つの世界的病患に対する抵抗こそ今日のこの地上の最も重大な課題であり、精神の正当な権利である」と云わしめたもの、それは云うまでもなく、人類への無限なる愛情である。かかる人類愛に貫かれた精神は、人間性が過度な理性や技術或は国家主義等によつて虐げられる時、それを黙視することができない。「人間が悟性を極度に緊張させて理性の縁のないことまでも理性で始末しようとするのはいいことではない。そういう行き方をすると、アメリカ人の理想やボルシェウイクの思想が起つてくるのだ。両方とも極度に理性的で、人生を他愛もなく単純化することによつて極度に人生を無一文にしているのだ。」<sup>6)</sup> これは、現代精神の誤謬を指摘し、第二次世界大戦の勃発を予言した、あの「荒野の狼」(Der Steppenwolf, 1927)の中のハリー・ハラールの言葉である。更に遡れば、第一次世界大戦勃発当時には、「友よ、こんな調子ではなく！」(O Freunde, nicht diese Töne!, 1914年4月)や「或る国務大臣へ」(An einen Staatsminister, 1917年8月)等の数篇の評論をもつて、いわゆる愛国主義一辺倒の同胞や政治家たちの反省を希求した。おかげでドイツで

は売国奴のように非難され、多くの新聞雑誌からボイコットされるという憂き目にあつたが、それに耐え抜いたヘッセの立派な態度は、敵国の陣営にあつたロマン・ロランから「ゲーテ的態度」として称揚された。上記のヘッセの評論の一つに、彼が模範としたゲーテについての一節がある。「ゲーテは1813年<sup>7)</sup>に一篇の軍歌も作らなかつたけれど、決して非愛国者ではなかつた。しかし、彼が何人にもまさつて知つており、愛しておつたドイツ精神への愛以上に、彼には人間精神に対する愛があつた。彼は、思想、内心の自由、知的良心という国際的世界に於て市民であり、愛国者であつた。そして彼の思想の昂揚した時、彼の目には、諸国家の運命はその個々の重要性に於てではなく、全体の運動の中の一環として映じたのである。」これらの評論及び第一次大戦後の彼の諸作品に窺われる文明批判、時代批判は精神文化擁護への詩人の熱意を如実に示すものである。そしてその態度は、もはや単なる傍観者のそれではなく、世界の歴史に対する連帯責任を自覚した者のそれである。

第一次大戦という歴史的な事件に直面して、政治と歴史に無関心でおれなくなつたのは、ヘッセばかりではなかつた。ヘッセと常に並び称せられた現代ドイツの偉大な作家、トーマス・マンもその一人であつた。第一次大戦勃発当時、マンは長篇「魔の山」の執筆中であつた。当時、デモクラシーを唯政治的にのみ解釈していたマンは、「非政治的人間の省察」(Betrachtungen eines Unpolitischen, 1915~17, Veröff., 1918)を書くことによつて、自己の精神的基盤を確認し擁護しようとした。即ち、マンは政治を精神とかかわりのないものと見て、欧米のデモクラシーに対して、ドイツ伝統の文化(音楽とロマン主義の精神)を護ろうとしたのであつたが、デモクラシーが人間の尊厳を守るヒューマニズム意識の脈々と流れている国家社会の原理であることを悟つてからは、ドイツの伝統的な精神の高貴性と現実の欧米のデモクラシーの総合を望むようになった。だがそこに至る迄には、ドイツの敗戦、ファシズムの抬頭、ナチスの野蛮・迫害という長年にわたる苦しい体験が必要だつたのである。その間のマンの政治的見解の変遷を示す主な論文に、「ドイツ共和国について」(1923)、「文化と社会」(1929)、「尺度と価値」(1938)、「来るべきデモクラシーの勝利について」(1938)などがあるが、これらの文筆上の活動に並ぶ、1920年

代、30年代に於ける彼の対国家主義の活動振りは、第一次大戦当時の保守的態度とは全く別人の感である。彼が人間の本来あるべき姿を探るべく、大作、旧約聖書のヨーゼフ物語の筆を執つたのは、ナチスのファシズムの嵐のさ中であつた。1922年にノーベル文学賞を受けたが、1933年にナチスが政権をとるとスイスへ移住する。翌年にはアメリカへ旅行。またヨーロッパ各地に講演、そして1935年に再渡米。1937年には、スイスから発行の「尺度と価値」の主筆を執り、ナチスの野蛮に対して、文筆家としては飽くまで古典や芸術の均斉や真価をもつて対抗しようとした。1938年ついにアメリカに移住すると、プリンストン大学で講義をもつた。更に「ショーペンハウアー」の講演、「来るべきデモクラシーの勝利について」の各地での講演、政治論集「ヨーロッパよ、心せよ」の刊行、ミュンヘン会議で西欧諸国がファシズムに屈服したことをなじる「この平和」等すべてこの年のものである。ドイツの現実を黙視できなかったマンは、このように文筆家として可能な最大の活動を行つて、この世を去る迄ドイツや欧米各国の良心に訴えることに努め続けたのである。

このようなトーマス・マンの精力的な活動振りに比べて、ヘッセの活動はどうかであろうか。彼は第一次大戦が始まると、ベルンのドイツ領事館に出頭して、然るべき奉仕をしたいと申し出た。翌年、スイスに於るドイツ捕虜保護機関の仕事が与えられた。スイスに抑留されているドイツ人捕虜に娯楽と心の糧を供給するこの仕事は、終戦の翌年迄続いた。彼はこの仕事に心血を注いだ、ということである。だが遺憾なことに、この仕事以後は、ヘッセはこれといつた活動の履歴をもたない。同じく精神文化や人道主義擁護への熱意に燃えていながら、トーマス・マン、兄のハインリヒ・マン、ロラン、アラゴン、ジード等に見られる反ファシズムの為の積極的行動がヘッセに乏しいのは何故だろうか。それには、第一次大戦当時の奉仕活動からの過労により、身体と神経の健康を害つたことが、大きく原因しているようだ。即ち、末子マルティンの不思議な病気や妻の精神病に苛められていた彼の心は、過労に拍車をかけられて、到々ノイローゼ状態に陥つた。その結果として、ヘッセが本来的にもつていた内省的傾向が増々深まることになつた。こうして彼は罪と責任を自分の内部へ内部へと追求する余りに、他人を責めることができなくなり、世界に向つて積極的

に発言したり、行動したりできなくなつたのである。しかしこのことはヘッセにとつては、幸いでもあつた。このようにして彼を襲つたノイローゼが、逆にヘッセに精神的解決の機会を与えたからだ。彼は、彼を診察した精神病医ラング——ユングの弟子——とたちまち親交を結び、その接触から自分の素質を体系的に精神分析するようになった。このように精神分析によつて自分の本来の傾向を再確認した彼は、自己本来の面目を受け入れ、貫き通す決意を持つに至る。後年の作品や評論には、現実政治及び政治家に対する、偏狭なまでに徹底した無関与の態度が窺われるが、それは老齡の落着きというような自然現象によるよりも、むしろ上に述べた事情によるものと思われる。

作品「ガラス玉演戲」のユートピア描写にはまたヘッセの政治的理想態度もあらわれている。ユートピアですぐ想起されるのは、プラトンであろう。少々唐突な感じもしないではないが、ここで今しばらく、プラトンの政治的理想態度を鏡にして、ヘッセのそれを映す試みをしたい。というのも、ヘッセはゲーテの「ウイルヘルム・マイスターの遍歴時代」に描かれた教育州を、作品「ガラス玉演戲」のカスターリエン州の歴史的段階であるとしているのみならず、作品それ自体を一種のプラトンの夢であると、明言しているからだ。

さて、プラトンとヘッセ、この両者は、政治への情熱と関心をもちながらも自らは政治に直接参加することはしなかつた、という点で一致している。また、一方プラトンは、国家を救うものは教育の他にはないと確信して、アカデミアで思索と教育に没頭したということであるが、他方ヘッセは、科学の進歩による画一化の傾向と物質文明の支配によりその精神を歪められた現代が救われ得る為には、少しでも多くの人々が真にゲーテ的精神の領国に住むようにならなければならないと確信して、かのスイスのモンタニョーラの地で精神の回復と擁護の為に一身を捧げたのであつた。このように両者は、同時代の政治からは一歩退き、或る距離をもつて、その墮落した現状を批評すると共に、未来への期待をもつてユートピアを描いたという点では非常に似ている。しかし、現実の政治に自らは積極的に参加しなかつたことの原因に於ては、両者の間にはつきりした違いがある。まず、プラトンの場合は次のような事情による。

アテネ民主主義の栄えと共にペリクレスが没したのは、プラトンの生れる前



年であつた。アテネのスパルタに対する屈服をもつてペロポネソス戦争が終つたのは、プラトンが23才、ソクラテスの門に入つて3年目のことである。彼が28才の紀元前399年には、アテネの凡愚政治はソクラテスを獄死させるという一大汚点を残している。そして、ペロポネソス戦争後、各ポリスの政治的混乱と全土の内訌を続けていたギリシヤは、遂に338年、プラトンの死後9年にして、マケドニアのために亡ぼされている。こうした混乱と無秩序と墮落と衰頹の一途を辿るアテネ国家を目のあたりにしながら、プラトンが政治に対してとらざるを得なかつた態度及びその理由は、次のようなプラトンの書簡で端的に窺い知ることができる。「色々な当時の事件や、政治家の人柄や法律や習慣を考察し、それを増々深く検討し、また私が増々年齢を加えて行くに従つて、国政を正しく運営することは、私には困難であると思われて来た。……初めのうちは政治への強い希望をもつていた私も、このような事実を目にし、そしてそれらが全ての方向へと広まりつつあるのを見て、目もくらむ思いがしたのであつた。そこで私は、上のようなすべてのことから、特に政治の組織について、事態の改善についての考察は決して放棄しなかつたが、政治の実際に加わることは適当な時期が到来するまで待つことに決したのである。……」<sup>8)</sup> 即ち、プラトンがアテネの政治に手を出さなかつたのは、当時の国家の法律、制度が殆ど治療すべからざる状態にある、とみたからであつて、もし国政を正しく運営する可能性があつたら、プラトンは自ら国政の運営に乗り出したかも知れないのである。アテネの政界と国民とに失望したために、直ちに政界に出ることを止めたまでであつて、その時期は待つていたのである。従つて、国家を救うものは教育の他にはない、と確信したと云つても、彼に於ては政治を離れて教育を論じ、教育を行うことは無意味であつた。シケリアのシラクーサイの政治的干渉に対するプラトンの数度にわたる積極的行動が、そのことを示している。

一方ヘッセの場合は、プラトンと異り、次のような理由による。クネヒトがカスターリエン<sup>9)</sup>を去るに当り教育庁に当てた書簡の中の一節を、ヘッセの考えを示すものとして、引用しよう。「学者、というよりむしろ賢者が、国家を支配すべきだというプラトンの要求を、私は主張したくはありません。世界はあの頃若かつたのです。プラトンは、一種のカスターリエンの創立者ですが、

決してカスターリエン人ではなく、生れつきの貴族で、王家の血統をひいていました。我々も貴族で、貴族階級を作っておりますが、精神の貴族であつて、血の貴族ではありません。……それにまた、統治するとなれば、我々の本来の分野、独特な尽力のまゝ、即ち模範的な精神生活の育成をたちまちゆるがせにするでしょう。……従つてカスターリエン人は政治家になるべきではありません。勿論危急の際は一身を犠牲にすべきではありますが、決して精神に対する忠実さを犠牲にすべきではありません。精神は、真理に対して従順である時だけ、有益であり、高貴であります。」即ちプラトンは、支配者と哲人（ヘッセの表現に依れば、血の貴族と精神の貴族）の一致を主張したのに対して、ヘッセは、プラトンのそういう要求は世界の若かつた古代であつたからこそ考えられたのであつて、複雑に分化発展してきた今日の世界に於ては夢にすぎない、と云う。現代に於て、もし学者が統治するとすれば、彼はたちまち模範的な精神生活の育成をゆるがせにしてしまわざるを得ないであろう、と云う。なぜなら、政治がその他の分野と同様、高度に専門化してきている今日では、統治者と学者は夫々別の特性を必要とするからである。クネヒトは云う、「商業や政治その他では、五の代りに十とだまし記すことが、時として一つの手柄、天才的な素質を意味するかも知れません。しかし我々の間では断じてそういうことはありません」と。

ここにクネヒトの云う「学者」とは、政治的支配者に対する哲人、いわゆる血の貴族に対する精神の貴族、即ち人間の精神に奉仕する者の意味であるから、クネヒトの以上の信念はまたそのままヘッセ自身のものと考えてよい。それというのも、評論集「戦争と平和」には同じ信念が随所に表明されているからである。そこでも、現実政治家と精神奉仕者を対立的存在とみなしている。例えば、マックス・ブロートへの返信<sup>10</sup>の中で、その信念は次のように語られる。

「私たち詩人や思想家は、ただ人間であるが故に、またどのような欠陥があるにしても、一切の自然的、有機的なものに対して、心と頭と同胞的な理解を持つているが故に、存在の意味があるのです。大臣その他政治に携わる者は、彼らの短期間の権力を、心や頭の上ではなく、彼らが『その意見を代表している』ところの集団の上に築きます。……彼らは、彼らを掩護し、彼らの責任

をまあまあ耐え得るものとしてくれるような遊戯の規則を持っています。……しかし私たちの遊戯の規則は、単なる遊戯の規則以上のものだと思います。それは真正の厳命であり、真実の掟であり、永遠の神的法則なのです。この法則を擁護するのが、私たちの奉仕すべき仕事であつて、いささかでも政治家たちの『遊戯の規則』に妥協したり、関係したりすると、たとえどのように高貴な意図を持つていたにしても、私たちはその奉仕の仕事を害つてしまいます。」

上のような趣旨のことを熱烈に書きつらねた後で、自分もまた、粗暴な現実との接触を怖れる逃避的、夢想家的芸術家の類に看做されてしまうのではないかと懸念して、第一次大戦以来の、現実に対する責任感と努力についても一言することを忘れてはいない。だが現実政治に対する時の彼の言動の限界は、自ら告白しているように、全く厳格であつた。詩人として、作家としての法則を越えた言動によつて現実政治をどうかしようとする、かえつて人道主義に対する敬意を害つてしまう結果になることを、彼は幾度もの試みと失望の体験によつて悟つたのである。このように正に頑迷なまでの信念の前には、当不当は別として、私たちは否応なしに敬服の念をいだかざるを得ない。しかしながら、同じく、詩人として、作家としての法則を守りつつ、最大の努力を惜まなかつたという点では決して異論のない他の勇敢な詩人、作家、哲学者たちと同列上でヘッセを比較してみる時、ヘッセの態度には、どうしても「消極」とか「静止」の感が拭い去れないのである。そこで、もう一度トーマス・マンに御登場願おう。

スイスより、ヘッセの「ガラス玉演戯」がトーマス・マンに届けられた時、マンは丁度「ファウスト博士」(Doktor Faustus 1947)と取組んでいたが、その送られた作品の全貌を目にすると、それが、今執筆中の自分のものと、形式、着想その他の点で多分に似かよっていることに驚いた、と後で「ファウスト博士の成立」(Die Entstehung des Doktor Faustus 1949)の中で回顧している。そしてそこで、ヘッセのものを評して、「苦悩の批評的爆発及び現代の悲劇の確認というよりもむしろ夢想的な文化ユートピアであり、文化哲学である、」<sup>11)</sup>と云っている。更にまた「私のものの方が尖つていて、鋭くて、激しくて劇的で(弁証法的だからそう云える)、時代に近くて、じかな掴み方をし

ている。彼のものは、私のものよりも柔かで、夢想的で、耽溺的で、ロマンティックで、道楽的（高級な意味の）である、<sup>12)</sup>と評している。このトーマスマンの評言は、勿論ヘッセの作品「ガラス玉演戯」に向けられたものである。しかしまた思うに、ヘッセの本性的特徴を指摘してこれ程肯綮に当る言葉も少いであろう。マンとヘッセは同じ言葉の芸術家であるが、両者の特性に敢えて大まかなレッテルを貼るならば、前者は主知主義的作家、後者は夢想的抒情詩人であろうか。ヘッセのこの特性は、またしばしば、ゲーテとの比較に於ても語られる。E・グネフコフの表現は簡明だ。「ゲーテは客観的理想主義者であり、現実の中に彼の生命を形成する。これに反して、ヘッセは主観的理想主義者で、現実の上部に理想世界を築く、<sup>13)</sup>と。チュービンゲンのヘッケンハウエル書店に働いていた青年ヘッセの前に、ゲーテは様々の姿を以て現われた。まず抒情詩人としてのゲーテは、彼にとって何ら問題とはならなかつた。その点では互に何ら相反する所がなかつたからである。「これに反して、文学者、人文主義者及び観念学者たるゲーテは、私にとって間もなく、一つの大きな問題となつた。ニーチェを除けば他のどの作家も、かつてこれ程私の心を奪い、私を引きつけ、悩まし、これ程和解を強いたことはない<sup>14)</sup>と老ヘッセは当時を回顧している。

ヘッセもマンも色々な意味でゲーテを模範とした。しかしマンが遂に抒情詩人ゲーテを受け継げなかつたと同様に、ヘッセはその反面のゲーテを受け継げなかつたようだ。ゲーテも理想主義者には違いなかつた。けれどもゲーテの理想主義は、常に反面に於て客観的で、決して大地から浮き上ることはなかつた。1775年から10年間のワイマル公国でのあの行政事務の実践は、そのようなゲーテにあつてこそ可能だつたと云える。ただこの場合、約150年にわたる時代の進展とその社会的基盤の相違も考慮する必要はあろう。成程、マンもヘッセも、過度に複雑化した現代に生れては、全面的にゲーテの後継者となることはできなかつた。だが、唯一つの最も大事な使命に関しては、両者はゲーテを共通の模範とし、忠実な後継者となつた。それは、個性と精神を具備するものとしての人間を愛し擁護しようとする使命である。マンとヘッセが、人間の精神に奉仕する者としての矜持を高く揚げつつも、言葉の芸術家の遵守すべき法則を

絶対に越えようとせず、現実政治とは常に一定の距離を保持していた点では、両者は同じ穴の貉ではあるが、それはむしろ、現代にあつてかの使命のとらざるを得ない姿勢と考えなければなるまい。このようにその使命とするところでは、全くの兄弟と看做されるマンとヘッセではあるが、ヘッセの方が他者よりも本来的に内省的・抒情的・夢想的傾向を強く持つていたためにか、同じ使命感に基くものではあつても、現実の政治・社会に対するヘッセの言葉にはどうしても鋭さが欠け、静的感じが免れないようである。その上、彼の発言はそもそも組織的・社会的力を期待すべき性質のものでもない。だからといつて、ヘッセには何も求むべきものはないと結論するのもまた、早計に過ぎよう。それというのも、組織的・社会的影響力を持とうとすること、政治を左右しようとする試みは、もとよりヘッセ自身の深く戒めたところであり、しかも彼が自分に許した唯一の試みは、詩人として、作家として、自分の読者に人間愛の神聖な根本的使命を繰返し呼びかけることであつたのだから。人間各自の中に潜在する価値を、神聖な一回性を自他共に認め、尊重するよう呼びかけること、そこに彼の全発言のアルファとオメガがあつたのである。要するに、人類の歴史への連帯責任を自覚してからのヘッセは、彼なりの本性を生かし、彼なりの態度で、彼なりの「使命」に一身を捧げたのであつた。ただその結果は、必然的に、人目を惹くようなものとはならなかつたけれども。

さて、これで私たちは、ヘッセが社会や政治に関して何かを云おうとした時、その本来の目論みがどこにあつたかを、ほぼ確め得たと思う。「人類が今日のような状態に墮しめられているのは、二つの精神病即ち科学の技術という誇大妄想と国家主義という誇大妄想の故だ」というヘッセの懸念は、あれから20年を経た現在、杞憂だつたとは遺憾ながら決して云えない。それどころか、彼の懸念はますます切実な響をすら持つようになつた。一方、懸念の主、ヘルマン・ヘッセは、今は亡い。だがもし私たちが、亡きヘッセを、見当違いの期待で当惑させさえしなければ、彼はその作品によつて、私たちの不安な心を慰め、勇気づけ、更には深い内的省察の入口へと導いてくれるであろう。そして、かつて彼自身がそうであつたように、暗中に道を遣い求める精神があれば、一条の微光をさし向けて、その精神が自らの力で救済への道を拓き進むことを祈つてくれるであろう。

- 註 1) フランス語の *feuilleton* [fœʁtɔ̃]。新聞の下方の文学・批評・科学記事等の欄、または連続小説等の意味。
- 2) H. Hesse : Peter Camenzind, Suhrkamp Verlag, S. 105
- 3) F. Nietzsche : Also sprach Zarathustra, Alfred Kröner Verlag, S. 52f.
- 4) H. Hesse : Krieg und Frieden, Suhrkamp Verlag, S. 211
- 5) 註 4) に同じ。
- 6) H. Hesse : Der Steppenwolf, Suhrkamp Verlag, S.254 f.
- 7) 解放戦争 (1813—5)
- 8) 白根孝之著「プラントンの教育論」による。
- 9) カスターリエン (Kastalien) とは、真に精神的な人々が、頹廢と没落の時代を戦い抜いて築き上げた一種の教育州となっており、ヘツセの夢みる精神国家の理想構造を作品「ガラス玉演戯」の中に模写したものである。これが独立州という意味は、精神的に国家の干渉を受けないということであつて、経済的には勿論国家に依存している。主人公の名前クネヒト (Knecht = 召使) は、精神の為に奉仕する者を象徴する。
- 10) Max Brod (1884—) は、1948年、ユダヤ人の新国家がアラビア人の侵入を受けた時、文化擁護の為、ヘツセに声明を出してくれるよう手紙を送つた。その懇請に対する返事。H. Hesse : Gesammelte Schriften 7.Band, 1957, Suhrkamp Verlag, S. 464 f.
- 11) Th. Mann : Die Entstehung des Doktor Faustus, 1949, Bermann-Fischer Verlag, S.68 f,
- 12) 註 11) に同じ。
- 13) Edmund Gnefkow : Hermann Hesse, Biographie 1952, Gerhard Kirchhoff Verlag, S. 22
- 14) H. Hesse : Dank an Goethe, Werner Classen Verlag Zürich, S. 9

日本独文学会編「ドイツ文学辞典」並びに高橋健二著「ヘツセ全集別巻」(新潮社版)を随所で参考にしたことを断ります。